

出身地の舞鶴へ帰還し親の膝下に入った。

―復員当時の家族の安否と生活状況―

復員し家に着く前に、甥より実母が昭和十九年九月三十日に死亡したことを聞かされ、慈母を失った悲しみ一入であった。思えばその日は私の大空襲受難の日で、最後かと思つた厄日であったが、母が身代わりになつたのだと思ひ諦めた。農家のこと故、戦後も食糧難はなし、一応生活は安定であつた。

復員後は職探しに奔走したが刑務所看守のみ募集あり、性に合わぬと思ひ兄の世話で特定郵便局に就職した。特定郵便局も改善され国家公務員の身分となり、生活の基盤である職務に精励し、三十一年間勤めた。その間数回各種表彰を受けた。現役終了後、市役所の当直員を約十二年間勤めた。

結婚後、家族の病気や台風の被害にもあつたが、住宅も新築し子や孫も生まれ平和である。

終戦そして

飢餓のレンパン島へ

―第三気象連隊―

愛知県 森 由治

―シンガポール脱出―

昭和二十年八月十五日、玉音放送は、非番の者が全員整列して、シンガポールの連隊本部で拝聴したが、混信が多くほとんど聞き取れなかつた。しかし、部隊の特性から極秘情報や、カルカッタ放送などを密かに受信している者があり、それらの話も聞いていたので、直ちに日本の敗戦は了解できた。

部隊は終戦の事務処理に移り、昨日までは戦闘訓練・防空壕掘りなどの幹部候補生としての教育訓練に明け暮れていた私たちも、書類や不用品の焼却を行った。八月二十三日、連隊本部・本部勤務隊・材料廠の約四百人は、残留申し送り要員（約四〇名）この残留要

員は英印軍との事務引き継ぎ・諸物資の引き渡ししが完了した後、本部への追及を拒否され、過酷を極めたシンガポール天河作業隊員として強制使役の運命を甘受、復員は昭和二十一年六月二十五日であった）を除いて、二十四日午後十二時までにシンガポール島から退去するように命ぜられ、ほうほうのていでジョホール橋を渡った。

今まではどこへ行くにも常にトラックや押収した乗用車に乗り、外出のとき以外にはほとんど歩いたことなどなかった者たちが、持てる物はできるだけ持って、暗闇の中をただ前の者にくっついて徒歩で行軍することとはなかなか大変であった。戦争が終わったことで、直ちに平和になるとも思わなかったが、これからが難行苦行の始まりとなった。軍隊と言っても、陸士出身の将校などには最も気に食わない官庁のような部隊で、一部の展開小隊を除くと直接戦闘にはタッチしたことはない後方部隊であっただけに、戦時中は楽な軍隊生活であった。そのために、戦後の捕虜生活はかえって身に応えたのである。

#### ―マレー半島の彷徨―

やつとの思いでジョホールバルに到着し、一休みして夜が明けると、我々はどこへ行くのか、どこに集合すればよいのか、一体この先どうなるのか何も分からないまま、道路脇のゴム林で野営をしては、さまよえる羊の群れのようにマレー半島の北上を続けた。ポンチャンケチル・アピアビ・レンガムなど名も知らぬ所をうろろろと歩かされた。

レンガムまで放浪を続けた所で、第三気象連隊特設第七中隊と合流した。この中隊は、徹底抗戦を企画した軍の上層部の意向で、敵の艦砲射撃から逃れ、気象中枢業務（総合放送）を続行するため、マレー半島の一番広い部分の山中（ラウブ）に勤務隊を移す目的で移動中、クアランブルで終戦を迎えた中隊である。この中隊からは多くの人員が作業隊に編入され、筆舌に尽くされない労苦を重ね、最後まで本隊に合流することなく、復員も昭和二十三年八月と、我が連隊では最後の復員となった。

九月十一日、ジョロトンに到着。国道沿いのゴム林

を臨時の駐屯地としてバラックを建設、約二カ月の生活が始まった。食糧品が少なくなり、次第に体力が消耗してきたが、私物を現地人と交換して個人で食べ物を確保したり、時には夜になるのを待って現地人のタピオカを失敬してきて、昼間コッソリ飯盒で炊いて食べた。タピオカは一本の茎を中心にして五、六本の地下茎が出る。ちょうど長めのサツマ芋のような実(地下茎)で味もサツマ芋に似ている。皆掘ってしまふと茎が枯れて、盗んだことが直ぐにバレてしまうので一本ずつ掘って、また土を掛けておくのである。それでも、直ぐに分かってしまい、度々駐屯地の司令官の名で盗まないように注意の通達があった。

その間に、シンガポール・マレー各地から次第に集まって来た各部隊から何名かずつが、作業隊と称して労役に駆り出された。我々が回された作業隊の作業は単純なもので、山から切り石を運び出したり、原っぱの草取りをやらされたり、ゴム林の中に積み上げられている生ゴムの運搬など、いろいろであった。日本人は能率を優先するが、彼らは報復の意味もあったのか、

時間厳守で、作業は捗はかっても捗らなくても、そんな問題もなく、炎天下で決められた時間から時間までは働いている格好をしていなければならない。監督に当たっている印度兵は、戦勝国の兵隊と言っても、日本兵に一目置いているような態度で、英軍の将校が来たら合図をするから、それまでは、しゃがみ込んで休んでいればよい、将校が来たら働けと言った具合であった。

しかし、我々の作業隊は幸運であり、前述連隊本部残留要員の天河作業隊や第七中隊マレー作業隊、タンジョンパーカー作業隊などは大変な労苦を強いられたことを復員後に知った。「軍隊は運隊」といわれたように、人の運命など一寸先は闇である。それに比べれば、腹は減ってたまらなかつたが、早くからレンバン島に回された我々は、まだまだ幸運な方であった。

#### ↑クルアン検問所通過↓

十一月十四日、ジョロトン駐留の第三氣象連隊主力、里川部隊長以下は英印軍の検問所のあるクルアンに向

け徒步行軍で出發した。

十一月二十四日、クルアン検問所に到着したが、道路の両側や待機場所と指定されたロープの回りには英印軍の兵員がいて、時計や万年筆等めぼしい私物を取り上げられた者が多数いて、ますます敗戦の哀れさが身に染みる。

検問所では、連合軍の戦犯リストと各人の照合を行い、

「白」＝戦犯の疑い無し

「灰色」＝戦犯の疑い有り

「黒色」＝戦犯の疑い濃厚

の三組のテントに区分され入れた後、私物を含む携行品の検査が行われた。

そのことは事前に、先に検問を受けた者からの情報伝わっており、記録や写真、現地購入品などを持っていると検査が厳しく、他の隊員に迷惑が掛かるので焼却または廃棄するよう指示があった。そのため大切な開戦以来のメモや写真、仏印のハチヤンで購入した鼈甲の煙草入れ、タイ国ランパンで購入した象牙のバ

イブや印材など一切を焼却したり、穴を掘って埋めたりした。

携行品の検査は、毛布にくるんだ携行品を差し出し、その横に携帯天幕を広げると、検査官が毛布の中の物を、一つずつ携帯天幕の上に放り投げる。投げられた物は携行許可というわけで、ここでも時計などめぼしい物は没収されてしまう。中には石鹸をくりぬいてその中に埋め込み上手にパスした者もいれば、失敗して多くの隊員に迷惑を掛けた者もあったようである。

この検問で連隊長は戦犯の疑いを掛けられ「灰色」テントに留め置きとなったが、後ほど疑いが晴れ、レンパン島の部隊に追及された。

検問を通過した者は、クルアンから列車に乗せられてシンガポールに戻されたが、直ちにトラックでケツペルハーバーに運ばれ、いよいよ無人島へ送り込まれることになる。

ーレンパン島上陸ー

レンパン島を当て字で「恋飯島」と書くことはつい

最近まで知らなかったが、誠に当を得た当て字であると感心させられた。

これから先のことは、狭い島にしながら、食うことに追われて、他のことを考える余裕も無く暮らしてきたので、自分の目の届くか、皮膚に触れる狭い範囲のことしか確かなことは分らない。全体的なことは帰国後に知ったことである。ただし、日付は復員船上で戦友と記憶を辿りながら記しておいたメモによるので、かなり正確であると思う。

十一月二十五日、ケッペルハーバーより乗船、南へ約六〇キロメートルほど下ったりオ群島の中のレンパン島（シンガポール島の約三分の二ほどの広さとか）、千鳥港に上陸。完全な島流しである。これでは逃亡も反抗もできない。

十一月二十六日、島のほぼ中央の高台、天王で仮泊、二十七日には隊貨（たいした荷物は無くとも、これから何日いや何年住むことになるかも分からない住まい造りに必要最小限の、鋸、鉋、軍刀を折ったもの、農耕用の鋤等）運搬のため千鳥港に引き返し、二十八日

夕刻、天王から一キロメートルほど東進した天下茶屋の部隊宿営地に到着した。

千鳥港とか天王という地名は先にレンパン島に上陸した部隊（先遣隊が上陸したのは十月十八日ということであった）が、大阪地区で動員された人たちだったのであるう、故国を偲んで命名したものと思われた。

まず第一に寝る所を用意しなければならぬ。生活には何よりも水が大切なので、少し穴を掘っておけば泥水もやがて奇麗に澄んでくるところから、窪地の低い所を住まいにしようと、各自が持つて来た携帯天幕を繋ぎ合わせ、羊歯を掻き集めて毛布を敷きこれで住まいの出来上がりだと思つたのも束の間、南方の猛烈なスコールのため水は樹間を縫い、灌木を浸し、羊歯類の根を洗って滔々たうたうと流れてくる。携帯天幕など何の役にも立たない。有つて無きがごとくバケツで水をブツかけられたような感じだ。おまけに、下からも水がどンドン湧いてくる。一晚中座つて夜を過ごし、翌日から山の中腹の小高い所に引越した。

## ―住居造り―

島には少しは現地人が住んでいたのか、所々に椰子の木とゴム林があつたが、これらは現地人にとっては貴重な品なので、椰子の実や葉を取ることとゴムの木を切り倒すことは絶対にしないようにと厳命されて来た。

しかし、木にならない葉っぱだけの椰子はどこにもある。携帯天幕では雨露が浚げないことが分かったので、この葉を集めてアタツプ（細い木を芯にして椰子の葉を二つ折りにしたものを重ね合わせて編んだもの）現地人の住まいの屋根はほとんどこれで葺いてある）作りに専念した。そうは言っても空き腹で、食料の受領に千鳥港まで行く者も必要なので、そんなに手早くできたわけではない。全く子供のころに読んだロビンソンクルーソーだ。屋根材ができたので、昭和二十年十二月四日、携帯天幕の上に行儀良く並べた住まいに移った。しかしこれはあくまで仮住まいなので、本格的な小屋を作ることになり、溜っている水に懲りて、今度は連隊中でも一番高い丘の頂上付近に造るこ

とにした。

負けたとは言え部隊は軍隊そのままの形で残されており、そのころに連隊の編成替えも行われ、本部と四個中隊に区分された。今まで行動を共にして来た甲種幹部候補生も九月十五日付でポツタム軍曹になったことを知らされ、各中隊に配属になった。私は海江田、田中と共に第三中隊に配属された。

住まい造りは各隊それぞれで、第四中隊は中隊全員が入れるように大きな家を造つたが、我々は十五、十六名の分隊に分かれて掘立て小屋を造ることになり、柱や床材を集めた。いずれも、すらりとした灌木で親指ほどの太さの物は床や屋根材、腕くらいの太さのものや柱や梁にした。アタツプ作りのときのように蔓を集めてそれらを縛り付ける。床はいくらすらりとしていると言っても丸木なので、そのままでは背中が痛くてたまらない。羊歯をしつかり集めてその上に敷き詰め、携帯天幕を被せて、二十一年一月七日、やっと内務班が出来上がり、内地帰還までここでお世話になった。

—食糧事情—

食べ物はレンパン島への先発隊と共に英軍から支給され、港地区に揚陸された米が命の綱である。後統梯団は連日続々と入島するのに、英軍が約束した追送糧秣は到着しない。一日一人の定量としては軽労働には耐えられる精米二八〇グラムが支給される予定であったと言うことだが、我々末端まで渡るころには中間の目減りもあり、普通の日の一食分の米は、直径約四センチ弱、深さ約二センチぐらいの缶に一杯（五〇グラム弱）が目安であった。一回の量を少しづつ減らして置いて、次の配給の前には多目に炊き、食べたような気持ちになつて、食生活に変化を持たせよう、と、言う気遣いもあった。十五人分を一斗缶で炊く、少しでも分量が増えるように、湯を多くして、米はこれ以上膨れないというまで煮る。お湯の中に僅かな粥が浮いているもので、梅干が入っているかと思つたら、自分の目玉が写っていた、というお粥が飯盒の蓋六、七分目で一食だ。

日一日と栄養失調者が増えていく。主食の減量に加

えて、副食はほとんど人手不可能であった。空腹感が募つてどうにもならないので、野草という野草で食べられるものは皆食べた。

栄養失調のため部隊からも犠牲者が出た。阿久沢上等兵が亡くなったということであった。

何もすることはないようでも、炊事、洗濯、住まいの繕い、糧秣受領など雑用はかなりあった。その中で、野草取りは重要な仕事になりゴムの若い葉は塩漬けにして食べると、内地の漬物を思い出させ、うまい食べ物であった。塩だけは配給もあったようだが、とても足りないもので、部隊で製塩班を編成して、海岸で海水を煮詰め、赤茶けて未だ苦汁の残っているものを配つてくれた。我々の部隊が上陸してから、このころまでの間が一番給食量が底を突いた時期だったようだ。

やがて、このゴムの葉には人体に有害なものが含まれているので食べてはいけないとの通達があり、羊歯の葉や、宿舎から随分離れた海岸まで野草取りに出掛けたりもした。蛇や鼠、「むかで」や「さそり」も兵隊たちの目に止まったら大騒ぎである。皆に取り囲ま

れて捕らえられ、焼かれて食用に供された。とは言ってもやたらにいるものでなく、大勢に分けなくてはならないので、骨のかげらか、尻尾の二センチぐらいが口に入ればよいところである。動き回るよりじっとしている方が体力を消耗しなくて済む勘定だが空腹感には勝てない。夜、横になっても空腹でなかなか寝付かれない。早く帰って「どこそこの寿司が食べたい」とか、「あそこのうどんはとでもうまかった」などと寝物語に喋べっているうちに、食べ物の夢を見ながら眠ってしまう毎日であった。

#### ― 糧秣受領 ―

体力の消耗は極度に足にくる。一週間に一度ぐらいの割で、糧秣受領がある。宿舎から三キロほど離れた千鳥港か四、五キロ離れた三船港まで取りに行かねばならない。ズック製の背囊に精米をいっぱいもらってくるのである。普通の体なら何でもないことだが、栄養失調で足が上がらない。おまけに、道は人が通って自然にできたもので、曲がりくねっており、連日のス

コールで泥濘と化し、その滑りやすいこと天下第一品である。しかも、所々に木の根が露出している。杖をつき、とほとほと歩く列は誠に情けない姿である。少し歩いてはつると滑ってスッテンコロリン。上げたと思つた足は上がらず、木の根に躓いた。わずかな木の根が越えられないのである。途中で休み休みして、やっと本部にたどり着く有様であった。

#### ― 道路作業 ―

島の交通手段は船便がよく、少しでも宿舎の近くに棧橋があれば糧秣受領も楽になる。今有る道路はとも道路とは言えない獣道であり、道路らしいものになければならない。また、棧橋ができれば、そこからの道路も作らなければならぬ。作業隊に回れば少しは配給が増量されるということである。

作業は道路作業班の他に、病院建設班、製塩班、農耕班、漁労班などいろいろあつたが、我々がお世話になつたのは製塩班だけで、その他の恩恵を受けた覚えはない。



私は道路班に回された。部隊の宿舎から直接海岸に出る民安街道造りである。

昭和二十一年一月四日、作業班の仮宿舎や道路造りの材料集めからはじまり、低湿地が多いので幾つもの土橋を造らなければならない。満足な道具もなしに、木を切り出し、杭を打ち、土を運ぶ仕事は重労働だ。

ここは海岸なので海に入って海草の根を取って食べる。水仙の葉のような海草の根がワサビのような形をしている。名前も分からず味も無いような代物だが我々はそれを海ゴボウと呼んだ。腹に溜りさえすれば一時の空腹感を押さえることはできる。作業用の増食だと言って徴びた日本軍の乾パンが渡され一同ちよつとだけ元気がでた。

道路作業が一カ月近く続き作業も終わりに近づくと、民安からの糧秣受領も始まり、沖合を奇麗な船が航行するのも見られた。月明かりの、あまりの明るさに夜明けと間違えて二、三時ごろに目覚め、海を眺めれば望郷の念一人である。

#### ―レーションの支給―

これより先、十二月十日を第一回目として米軍の口糧が配給されるようになった。いわゆるレーションと名付けられた携帯食糧であるが、日本軍の乾パンとは比べ物にならない。一食ごとにアルミの缶に詰められ一日分が朝・昼・晩の三缶一組のセットになっている。中のオートミールとかチョコレートとかキャンデーとか、その一つ一つが綺麗な包装紙に包まれていて、ラッキーストライクという煙草まで入っている。誠に結構な品物だが、難を言うところ、一食分を一日分にしなければならぬ。カロリーやビタミンは良いとしても、空腹感を満足させることはできない。ましてや、長い間口にしたこともない美味しい代物である。おやつ感覚で一食ぐらいペロリと口に入ってしまう。後の二日はお湯だけ飲んで、何も食わずに我慢していなくてはならない。

さらに参ったことは、一週間も二週間も便所に行きたくない。繊維質を取らないと、滓が少しも残らないのだらう。さて、排便が大変だ。尻の穴が痛くてたま

らないが、いくら力んでも、いつまでも出てくれない。一列に溝のように穴を掘った便所は満員だ。やっと出てくるのは、豆粒状の兎の糞のようなものが二、三粒だけである。

話は遠うが、大豆の配給があつた時を思い出す。このときは、胃が弱つていたためか、幾ら水を多くして柔らかく煮ても、少しも消化せずに、下痢患者が続出し、下痢にならなくても、食べた大豆は胃と腸を素通りして、粒のまま便所まで直通だつた。

ただ、レーシヨンの空き缶や包み紙はいろいろなものを利用して大いに助かつた。包み紙には防水のため、蠟がびつしり塗つてあつたのでそれを剥がして小さな空き缶に溜め、木の皮の繊維を芯にすれば結構蠟燭ろうそくとして使用できた。

#### ― 帰還の喜び ―

鳥の生活にも慣れてくると、器用な者も不器用な者も、それなりに暇を見付けてはいろいろな身の回り品を作つた。

また、相互慰安のために劇団が編成され、二月二日、我々の部隊からも、最後まで離さなかつたパイオリンを持った寸山大尉を長とする数名の劇団員が三船港方面に出掛けて行つた。

英軍の軍医少佐が衛生状況の視察に来たという話を聞く。少しでも食料事情が良くならないかと思う。

昭和二十一年三月ごろになると帰還真近というようなデマが飛び、一喜一憂するが、そのうちピタリと帰還の話は出なくなつてしまつた。新たに建築班が編成され、宝港の倉庫の建設が始まつたという。未だ何年かはこのような生活が続くのではなからうかと、憂鬱ゆううつになる。

道路作業も進んで、天王ロータリーまではジープが走れるようになり、四月十六日には、初めて荷車を引いて千鳥港まで糧秣受領に行つた。農耕班の努力でタピオカも根付き、少しは食料の足しになるかと思われたが、悲しんでよいのか、喜んでよいのか、これを口にすることもなく復員船に乗ることになつた。

四月十七日には我々の部隊では最初の内地帰還者水

戸軍曹以下が宿舍を後にした。四月二十二日になると谷口准尉以下六名が宝港に向けて出発した。

五月二日、里川部隊（我々の部隊）は第九梯団として内地に帰還することが決定した。部隊帰還に当たって、第二中隊指揮班付となり、分隊長を仰せ付けられる。今さら分隊長も蜂の頭もあつたものではないが、何としても無事内地に帰還しなくてはならない。何だか夢心地である。四日、真崎閣下（第三航空通信司令官真崎久満雄中将）に帰還の申告をし、五日、軍司令官石黒中将（第二十九軍司令官石黒貞蔵中将）の見送りを受けて帰国の途に着いた。

### 【解 説】

一 第三気象連隊 終戦 飢餓のレンパン島

この体験記は第三気象連隊の終戦時より後の記述である（前巻は戦中の行動と気象連隊について一般にあまり知られぬ一の解説であつた）。

一、第三気象連隊の終戦直前より復員に至る月・日歴を記す。

昭和二十年六月三十日 将校以下五五名の地上戦闘

部隊を編成、歩兵第二大隊長の指揮下とす。

同・六月三十日 第五飛行師団隷下地区部隊松本誠造以下四十八名に対する気象教育終了、当隊に転入。

同・七月十日 ラウプにおいて乙気象報実施。

同・七月七日 一三野戦気象班、当隊の指揮下を脱し、第二軍の指揮下に入る。

同・七月二十二日 連隊長サイゴン南方軍気象部における気象会議に出席、二十七日、昭南に帰着。

同・七月二十三日 第四中隊ウボンに集結完了。

同・八月五日 第一大隊に対し第三航空軍司令官より賞詞授与。

同・八月八日 特設第七中隊クアラルンプールに到着。

同・八月十五日 終戦

同・八月十六日 副官に機秘密書類、重要書類の焼却を命ず。

同・八月十七日 在ラウブ大和隊ソクタブに転進。

同・八月十八日 降伏受諾。作戦行動停止、所在駐屯軍航空最高指揮官の指揮下に入る。

同・八月二十三日 十八時以降氣象管制を解除。

同・八月二十五日 作戦任務解除、一切の武力行使停止、進駐軍司令部より部隊主力二五日零時までコースウェイ通過クルアン地区へ集結を命ぜられる。副官、材料廠長、江口主計以下三六名昭南残置。副官代理・松元中尉。

同・九月二日 昭南残置部隊は進駐軍(RAF)に兵器器材を差し出す。航空地区司令部(有馬部隊)の指揮下に入りチャンギー地区に移動。  
同・九月二十五日 上田副官戦犯容疑にてクルアン法務部に出頭。

同・十月 部隊主力、大和隊、特七中隊と合流。

同・十一月二十五日 部隊主力レンパン島に移駐。

昭和二十一年二月二四日 第三中隊主力大竹入港。

二十六日復員。

同・四月二十二日 第一中隊浦賀入港、

五月十四日復員。

同・五月八日 第一大隊本部、四中隊大竹上陸、

九日復員。

同・五月九日 第二中隊大竹入港召集解除、

十日解散。

同・五月十九日 部隊主力名古屋にて復員。

同・六月十五日 第二大隊本部、五、六中隊

浦賀入港。

同・六月二十二日 第二大隊本部、五、六中隊

召集解除復員。

同・六月二十五日 昭南残置者、和歌山田辺港

入港復員。

同・七月一日 タンジョンパーカー作業隊

名古屋上陸、二日復員。